

時 論

世界は多極化に向かっているのか

アメリカの政治学者サミュエル・ハンティントンが『文明の衝突と世界秩序の再構築』(1996 年)を世に出してから今年でちょうど 30 年になる。同書は、ポスト冷戦の世界について、西欧、中華、イスラム、正教、ヒンドゥー、ラテンアメリカ、仏教、アフリカ、日本からなる 9 つの文明圏が並び立つ世界像を提示したが、文明を単位として世界は多極化すると構想したその「予言」は、21 世紀第 2 四半世紀の現在に至るまで、当たったとは言い難い。一方で、われわれは「冷戦」に代わる世界像を明示できないまま、依然「ポスト冷戦」のなかにとどまり続けているようにみえる。

ところで、世界秩序のあり方については、単純化すると、1 極、2 極、3 極、4 つ以上はまとめて多極とし、加えて無極という 5 つの構造に類型化することができる。

「1 極構造」というと、冷戦終焉を機に生じたアメリカ合衆国を唯一の超大国とする米国 1 強体制が想起される。だが、戦後自ら構築してきた「ルールに基づく国際秩序」を自ら破壊しながら単独行動主義を強めるアメリカ、経済のみならず科学技術、軍事など多方面において米国を猛追する中国の現状に照らせば、現代世界が米国 1 極構造から遠ざかりつつあることは明らかである。そうしたなか、「アメリカ 2.0」、すなわち「アメリカの世紀」が継続する可能性はますます低下しているように見受けられる。とはいえ、金融面における米国の覇権は健在である。基軸通貨は引き続き米ドルであり、世界の外貨準備の半分強は米ドル建て資産で構成され、世界の株式市場時価総額の半分は米国企業に占められている。サファヴィー朝ペルシアの最盛期、都であるエスファハーンはその富の大きさから「世界の半分」と称えられたが、株式資本主義という観点からみると、アメリカ合衆国は今なお世界の半分なのである。

一方、「米国 1 極構造」に代わり「中国 1 極構造」—たとえば地球大の「現代版冊封・朝貢体制」—の時代が到来する可能性は、国際ビジネス言語としての中国語の通用度の低さや、国際金融取引における中国元のプレゼンスの小ささなどを踏まえると、今後も長期にわたって低いままにとどまるものと考えられる。なお、SWIFT(国際銀行間通信協会)によれば、2026 年 5 月における国際決済取引におけるシェアは、米ドルの 50.7%に対し、中国元は 2.8%にすぎず、日本円の 3.3%にもおよばない。

「2 極構造」については、第 2 次世界大戦が終結した 1945 年から東欧革命が勃発した 1989 年の間の、資本主義陣営対社会主義陣営の「東西冷戦」構造が典型である。もっとも、軍事面のみを捉えるならば、米ソ 2 強体制であったことはたしかであるものの、経済的には米国が圧倒的な優位に立っていた。以上を踏まえると、冷戦期の世界構造はせいぜい「1.5 極構造」であったというべきかもしれない。

昨今語られる「冷戦 2.0」は、東西対立からのアナロジーから、西側陣営と反西側陣営の対立をもって冷戦の再現とみる世界像である。だが「反西側陣営」を仮に「陣営」と呼びえたとしても、そこには旧東側陣営に存在したイデオロギーの共有がない。また、ソ連に相当する中核的国家も存在しないし、加えて反西側陣営の中心に位置する中露の連携は最高指導者個人間の関係によるところが大きく、不安定である。反西側陣営に共通するのは、米国に対する承認欲求や対抗心、ルサンチマン(悲憤)にすぎないように思われる。他方、「西側陣営」においても、とりわけ第 2 次トランプ政権発足以降、大西洋の両岸間の亀裂は埋めがたいほど大きくなっており、一枚岩とはほど遠い。さらに加えていえば、アメリカにせよ中国にせよ、たとえば 1950～60 年代における米ソほどのパワーは、ハードパワー(経済力、軍事力)であれソフトパワー(文化、価値観、外交力)であれ、持ち合わせていない。

「3 極構造」というと、虚構の世界では、ジョージ・オーウェルの『1984』で描かれた、3 つの勢力圏による世界分割がイメージされ、現実世界では、第二次大戦前夜から戦中にかけてみられた、民主主義、ファシズム、社会主義の 3 陣営による三つ巴が挙げられる。インドがしばしばその盟主を自認する「グローバルサウス」は、米欧、中露に続く第 3 勢力になることを志向しているようにみえる。だが、グローバルサウスは陣営と呼ぶにはあまりに一体性に欠いており、したがって、現代世界は 3 極構造からはほど遠い。

「多極構造」については、冒頭にふれたハンティントンによる「文明の衝突」の世界像がその一例であるが、歴史を振り返ると、ナポレオンが敗北した 1815 年からドイツが統一された 1871 年までのヨーロッパの国際秩序、すなわち、英仏普墺露の 5 か国からなる勢力均衡の時代がまず思い浮かぶ。米国の国際政治学者ジョセフ・ナイのいう「緩やかな多極」の時代である。しかし、これはあくまで欧州に限られた国際秩序であり、世界を見渡すと同時代は欧米列強が地球上の大部分を支配する帝国主義の時代であった。

多極構造といってももうひとつ頭に浮かぶのは、「ブロック化」の時代である。「狂騒の 20 年代」に終わりを告げるかたちで 1929 年に始まり、1930 年代半ばまで続いた世界恐慌の過程で、大国は保護主義を強め、世界経済は通貨圏毎に「ブロック化」が進展していった。米国は南北アメリカに「ドル・ブロック」、英国とフランスは本国と植民地にそれぞれ「スターリング・ブロック」、「フラン・ブロック」という閉鎖的経済体制を築いた。海外植民地を失っていたドイツは「中央ヨーロッパ」を勢力圏として再構築、日本は「東亜」という新秩序を作り出すことを試み、ソ連は一国社会主義を確立した。その他の国・地域はそれらを取り巻く衛星となり、世界は 6、7 個の単位に再編された (E・H・カー『危機の二十年』)。

戦間期と現下の世界を比較すると、民主主義の衰退、権威主義あるいは全体主義の台頭のほかにも、少なからぬ類似点があることに気づく。たとえば、英国と大陸欧州、米国と欧州の離間、中国やインド、ロシアの勢力圏拡大の動き、世界的な保護主義の強まりであり、こうした現象はブロック化を想起させる。その意味でいえば、現在の世界は戦間期における多極システムの再現にみえる。仮に同じ末路を辿るとするならば、人類は世界大戦という悲劇に行きつくことになる。

「無極構造」は、ホブズのいう「万人の万人に対する闘争」の国際政治版であり、ユーラシアグループ代表イアン・ブレマーのいう「G ゼロ」の世界、すなわちリーダー国家なき世界である。しかし、国際政治学者ハンス・モーゲンソーが『国際政治』のなかで論じたように、「国際政治とは、他のあらゆる政治と同様に権力闘争」であり、すべての権力闘争がそうであるように、国際政治空間においてアクターのすべてが等しいパワーをもつわけではなく、また主体的に行動したり影響力を行使したりすることができるわけでもない。極の数がいくつであれ、国際政治はリーダー国家を中心にまわるのであり、リーダー国家なき国際政治は想定しがたい。問題は、リーダーシップの有無ではなく、そのあり方や影響力にあるものと考ええる。

あるいは、現在の世界秩序は、以上の 5 類型のどれでもなく、ある側面からみると 1 極構造であるものの、別の側面からみると 2 極構造だったり、多極構造だったりというように、「ハイブリッド」な構造をもつものとして捉えるのが妥当なのかもしれない。そして、そうしたハイブリッド性こそが、現代は「VUCA」(不安定、不確実、複雑、曖昧)の時代である、とするありがちな言説につながっているのかもしれない。

しかし、この世はつねに不確実である。世界は不確実だからこそ、われわれは構想し行動するための地図としての世界像を提示し続ける必要があるものと思考する。歴史はそのための鏡である。モンテニョがいうように、どんな出来事もどんな形態も、他の出来事や形態と全く同じということがないように、どんなものも他のものと全く違っているということはないからである。

(調査部 上席研究員 村上 和也)

※ 本レポートは作成時に入手可能なデータに基づく情報を提供するものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。また、執筆者個人の見解であり、当社の公式見解ではありません。ご質問等はchosainfo@smtb.jpまでご連絡ください。